II Kings 9:9-37, 10:1-30

（II 列王記9：9－10）「『「アハブの家をネバテの子ヤロブアムの家のようにし、アヒヤの子バシャの家のようにする。犬がイズレエルの地所でイゼベルを食らい、だれも彼女を葬る者がいない。」』こう言って彼は戸をあけて逃げた。」

邪悪なイゼベルは、神さまのさばきから逃れることはありません。

（II 列王記9：11－13）「エフーが彼の主君の家来たちのところに出て来ると、ひとりが彼に尋ねた。『何事もなかったのですか。あの気の狂った者は何のために来たのですか。』すると、エフーは彼らに答えた。『あなたがたは、あの男も、あの男の言ったことも知っているはずだ。』彼らは言った。『あなたは偽っている。われわれに教えてくれ。』そこで、彼は答えた。『あの男は私にこんなことを言った。「【主】はこう仰せられる。わたしはあなたに油をそそいでイスラエルの王とする」と。』すると、彼らは大急ぎで、みな自分の上着を脱ぎ、入口の階段の彼の足もとに敷き、角笛を吹き鳴らして、『エフーは王である』と言った。」

エフーが王として油そそがれたことがわかると、すべての者はあわてました。彼らは角笛を吹き鳴らして

「エフーは王である」

と言いました。ヨラムはイズレエルで病気であり、アハズヤが彼をそこに訪ねています。今、イズレエルで何が起こるのでしょう？

エフー、ヨラムを処刑する

さて、イズレエルに下ってきていたヨラムは、神さまが自分を王座から退けてエフーをイスラエルの王とされたことを知りませんでした。ヨラムと、ユダの王アハズヤとがそこを訪れているとき、見張りの者が騎馬隊が来ていることを報告します。ヨラムは、彼らに質問するために使者を送ります。

「平和なことですか？」（訳注：日本語の聖書本文では、「お元気ですか」となっています）

あなたは良いニュースを持って来られたのですか？それとも悪いニュースですか？というわけです。その質問に答える代わりに、エフーは自分のうしろについて来いと命じます。さて、ふたり目の見張りの者がヨラムに報告します。

（II 列王記9：20）「見張りはまた、報告して言った。『あれは彼らのところに着きましたが、帰って来ません。しかし、車の御し方は、ニムシの子エフーの御し方に似ています。気が狂ったように御しています。』」

エフーのところに送られた使者たちは、王のところに帰っては来ませんでした。なぜなら、エフーはこの王を抹殺するために来ているのですから。そこで、ヨラムとアハズヤ自身が戦車に乗ってエフーに会いに出かけます。

（II 列王記9：22）「ヨラムはエフーを見ると、『エフー。元気か』と尋ねた。エフーは答えた。『何が元気か。あなたの母イゼベルの姦淫と呪術とが盛んに行われているかぎり。』」

明らかに、王の家来たちの中に、王母についてあえてこのようなコメントをする人はひとりもいるわけはありません。ヨラムはすぐに、エフーが謀反を率いていることに気づきます。

（II 列王記9：23－24）「それでヨラムは手綱を返して逃げ、アハズヤに、『アハズヤ。悪巧みだ』と叫んだ。エフーは弓を力いっぱい引き絞り、ヨラムの両肩の間を射た。矢は彼の心臓を射抜いたので、彼は車の中にくずおれた。」

ヨラムが逃げようとしたとき、エフーは弓を引き絞り、ヨラムの心臓を矢で射抜きます。このとき、ヨラムはエホラム（Jehoram）と呼ばれていることに注目してください。（訳注：日本語では違う名前に訳されていません）ヨラムもエホラムも、ヘブル語では同じ意味で、イスラエルの王にも、ユダの王にも両方が同じように使われています。

エフー、アハズヤを処刑する

エフーは、ヨラムを抹殺するために、イズレエルに来なければなりませんでした。すでに見てきたように、アハズヤはヨラムを訪ねて来ていました。ついでながら、アハズヤは悪い人たち、つまりアハブの家の者たちと付き合っていました。アハズヤは悪いときに悪いところにいたのです！

（II 列王記9：27）「ユダの王アハズヤはこれを見ると、ベテ・ハガンの道へ逃げた。エフーはそのあとを追いかけて、『あいつも打ち取れ』と叫んだので、彼らはイブレアムのそばのグルの坂道で、車の上の彼に傷を負わせた。それでも彼はメギドに逃げたが、そこで死んだ。」
エフーに従っていた者たちは、アハズヤを追跡して彼に致命傷を負わせました。

（II 列王記9：28）「彼の家来たちは彼を車に載せて、エルサレムに運び、ダビデの町の彼の墓に先祖たちといっしょに葬った。」

エフー、イゼベルを処刑する

（II 列王記9：30）「エフーがイズレエルに来たとき、イゼベルはこれを聞いて、目の縁を塗り、髪を結い直し、窓から見おろしていた。」
さて、王母であるイゼベルの殺害の箇所にやってきました。これはたしかに恐ろしいことでした。彼女は血生臭く、意地が悪く、ひどい女性でした。彼女は、シドン人の王、エテバアルの美しい娘で、王族の出身でした。おそらく彼女は、この時代にも、歴史全体を通しても、もっとも美しい女性のひとりだったことでしょう。若かったときには、イゼベルはトロイのヘレンや、サロメ、クレオパトラやカトリーヌ・デ・メディチと並ぶ美人だったのではないかと思います。

アハブとイゼベルが結婚したとき、その結婚はその年の社会的なできごとでした。ふたつの王国の最高の人々が一緒になったのです。とても多くの王族が集まりました。それはうやうやしく、威厳のある結婚式でした。エリヤでさえも、そのできごとに文句をつけることはできませんでした。両方の王国の一般人たちが賞賛しました。地獄の悪霊たちもそのお祝いに加わったと付け加えておかなければなりません。悪霊たちは陽気に笑い、悪魔は喜びました。ところが、天国の門には喪章がつけられ、天使たちは泣き悲しみました。婚礼の鐘の代わりに、弔いの歌が流れました。この婚礼に対する天国の見解はそのようでした。この世はいつもそうであるように、ものごとを違うように見たのです。なぜ、この世は楽観的で、天国は悲観的なのでしょう？神さまは心を見られます。人間には、物事を見るのに限られた見方しかできません。

イゼベルは歴史上、もっとも顕著な女性たちのひとりです。彼女は能力があり、影響力があり、そして支配的な性質を持っていました。彼女の邪悪な影響は、三つの王国に及ぼされ、彼女の死後も続きました。彼女の悪名高い生涯は、ことわざになりました。彼女は一連の毒を歴史の中に注ぎいれました。聖書は、締めくくりの黙示録に到達するまで、二度と彼女のことに言及することはありません。

彼女の名前は暗示的です。それは、「結婚していない、貞節な」という意味です。ここには、異常性と性的倒錯の隠されたほのめかしがあります。彼女はおそらく冷血で、性的感情のない人物だったかもしれませんが、それでも、美しく魅惑的でした。強い男たちが、彼女の誘惑的な魅力に屈服しました。彼女に抵抗するものは誰もありませんでした。アハブでさえもそうでした。彼女はアハブを服従させ、北王国を支配しました。

彼女はバアル礼拝を持ち込みました。彼女は450人のバアルの預言者と、400人のアシュタロテの預言者とを国に入れました。彼女は向こう見ずで、暴力的で、貪欲で、残忍でした。彼女は神さまの預言者たちを殺しました。神の人たちは地下にもぐりました。彼女は自分の娘がダビデの家に嫁ぐように工作しました。アハブの配偶者として長く統治している間、彼女の意思が優先されました。エリヤのほかには誰も、あえて彼女に反対しようとはしませんでした。彼女は、シェイクスピアのマクベス夫人、ギリシャ悲劇のクリュタイムネストラのような人物です。彼女の犯した犯罪はたくさんありました。彼女の影響下からは自由に血が流れました。誰も彼女に反抗しませんでした。しばらくの間、まるで神さまが隠れられ、何もしておられないかのように見えました。

ついに彼女は最大の犯罪を犯しました。アハブがぶどう畑を手に入れられるようにと、彼女はナボテの死の手はずを整えました。彼女の仕業は横暴で冷血な殺人です。それは卑劣な行いであり、天はそれ以上沈黙していることはできませんでした。神さまの忍耐も底をつき、神さまはご自分のさばきを宣告するために

エリヤを送られました。清算の日がやって来ました。始めにアハブが殺され、預言者が語ったとおりに犬たちがアハブの血をなめ尽くしました。今度はイゼベルの番です。彼女は踏み付けられ、適切な埋葬ができないほどに犬たちが彼女の死体を食い荒らしてしまいます。アハブの死から14年がたっていました。疑いなく、イゼベルは神さまのみことばが自分に成就することなどないと信じていました。彼女は平然としていました。彼女は神さまをものともしていませんでした。彼女はおそらくアハブの死は偶然だったのだろうと考えて、イズレエルに留まっていました。彼女は、自分が上手くやりおおせて、自分には何も起こることはないと感じていました。でも、ご存知のとおり、人生の十字路のすべての領域には、ネオンサインのように明らかに神さまの定めが書き記されています。

（ガラテヤ6：7）「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。」
（ルカ6：38）「・・・あなたがたは、人を量る量りで、自分も量り返してもらうからです。」

この章は、歴史の中でもっとも汚く、サディスト的な章のひとつです。身の毛のよだつような、恐ろしく血なまぐさい光景です。それに加えて、ひどい事件です。聖書のページの中で、もっとも不快きわまり、嫌悪をもよおさせるシーンのひとつです。

イゼベルは王母です。彼女は、イズレエルの宮殿で豪奢な生活をしてきていました。あの恐ろしい男エリヤのとんでもない預言は成就していません。突然、北のほうからすごい速さで戦車がやって来ました。エフーが猛然と戦車を走らせて来たのでした。彼はたった今、ふたりの王を殺害してきたのです。ユダの王と、イスラエルの王、すなわち彼女の息子、ヨラムでした。彼女はどうするでしょう？彼女は目の縁を塗り、髪を結い直し、窓から見おろしています。この高慢な女王はまだ、自分を捕まえようとしている人物を、自分の魅力で誘惑できると思っています。彼女には23歳の孫息子がいたのです。もう若くありません。彼女は年老いた女性です。この色あせた女王を魅力的に見せることができるローションやパウダーやスプレーやクリームの、秘密の処方はどこにもありません。二階の窓からエフーを見下ろす彼女は、お世辞から始めます。

（II 列王記9：31）「エフーが門に入って来たので、彼女は、『元気かね。主君殺しのジムリ』と言った。」
彼女はそれとなく、
「いっしょにこのことについて話せないかしら？いつか私に会いに来なさいよ」
と言っているのです。

（II 列王記9：32－33）「彼は窓を見上げて、『だれか私にくみする者はいないか。だれかいないか』と言った。二、三人の宦官が彼を見おろしていたので、彼が、『その女を突き落とせ』と言うと、彼らは彼女を突き落とした。それで彼女の血は壁や馬にはねかかった。エフーは彼女を踏みつけた。」
エフーはイゼベルのことばに動かされもせず、平然としています。彼には哀れみも情けもありません。イゼベルはエフーに畏敬の念を起こさせることはありませんでした。彼女は、彼の何の関心もひきませんでした。エフーは彼女を尊敬さえしていませんでした。彼は
「その女を突き落とせ！」
と言ったのです。宦官たちは彼女を突き落とし、イゼベルはうれたスイカのようにびしゃっと壊れました。悲劇の記録のすべての中でも、これはおそろしく、ひどく、そして鮮やかな場面です。ハモンドは、このような屈辱は歴史の中に並ぶものがないと言っています。これは本当に先例がありません。王母は習慣的に、尊敬をもって扱われたのです。

（II 列王記9：34）「彼は内に入って飲み食いし、それから言った。『あののろわれた女を見に行って、彼女を葬ってやれ。あれは王の娘だから。』」
このようなひどいことをしたあとに、エフーはよく飲み食いできたものです。誰かが言ったように、彼は「人の姿をした鬼畜」でした。彼は何の礼儀正しさもなく、確かに騎士道もない、荒々しい兵士でした。彼にあったも

のは、露骨な野心だけでした。彼はどんな犯罪からもしりごみすることはありませんでした。彼は腐敗し、堕落していました。

（II 列王記9：35－37）「彼らが彼女を葬りに行ってみると、彼女の頭蓋骨と両足と両方の手首しか残っていなかったので、帰って来て、エフーにこのことを知らせた。すると、エフーは言った。『これは、【主】がそのしもべティシュベ人エリヤによって語られたことばのとおりだ。「イズレエルの地所で犬どもがイゼベルの肉を食らい、イゼベルの死体は、イズレエルの地所で畑の上にまかれた肥やしのようになり、だれも、これがイゼベルだと言えなくなる。」』」
エフーがイゼベルを葬らせるためにしもべたちを送ったときには、犬たちがすでに彼女を食い荒らしてしまっていました。犬たちは盛大なグルメな食事をしました。でも、このことによって天国には何の笑い声も起こりませんでした。また、悲しみもありませんでした。おそらく天国では、黙示録のなかで将来このように言われると書いてあるように、次のように言われたことでしょう。

（黙示録19：2）「神のさばきは真実で、正しいからである。神は不品行によって地を汚した大淫婦をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされたからである。」

イゼベルの恐ろしい死は、ガラテヤ人への手紙の6：7の真理をもう一度描き出しています。

（ガラテヤ6：7）「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。」

10章では、エフーの凶悪な心を通して、アハブの家へのさばきが続けられます。

アハブの家がさばかれる

（II 列王記10：1－3）「アハブにはサマリヤに七十人の子どもがあった。エフーは手紙を書いてサマリヤに送り、イズレエルのつかさたちや長老たち、および、アハブの子の養育係たちにこう伝えた。『この手紙が届いたら、あなたがたのところに、あなたがたの主君の子どもたちがおり、戦車も馬も城壁のある町も武器もあなたがたのところにあるのだから、すぐ、あなたがたの主君の子どもの中から最もすぐれた正しい人物を選んで、その父の王座に着かせ、あなたがたの主君の家のために戦え。』」
エフーはアハブの息子たちに、イスラエルの王座のために戦う特権を与えています。70人の息子たちのうち、誰ひとりとして進んでエフーと渡り合おうという者はいません。
すると、イスラエルの長老たちは、自分の首をつなぐために、これらの70人のアハブの息子たちを殺すことでエフーへの忠誠を証明します。

（II 列王記10：11）「そして、エフーは、アハブの家に属する者でイズレエルに残っていた者全部、身分の高い者、親しい者、その祭司たちを、みな打ち殺し、ひとりも生き残る者がないまでにした。」

エフー、ユダの王子たちをを虐殺する

（II 列王記10：12－14）「それから、エフーは立ってサマリヤへ行った。彼は途中、羊飼いのベテ・エケデという所にいた。その間に、エフーはユダの王アハズヤの身内の者たちに出会った。彼が『あなたがたはだれか』と聞くと、彼らは、『私たちはアハズヤの身内の者です。王の子どもたちと、王母の子どもたちの安否を気づかって下って来たのです』と答えた。エフーは『彼らを生けどりにせよ』と言った。それで人々は彼らを生けどりにした。そして、ベテ・エケデの水ためのところで、彼ら四十二人を殺し、ひとりも残さなかった。」
アハブの家を片付けたあと、エフーは王座につくためにサマリヤに行く途中でした。彼はユダの王アハズヤの42人の息子たち（または甥たち）に出会いました。エフーは彼らも殺しました。でも、興味深いことは、その中のひとりが助かったことでした。彼はサウルの家の子孫でした。

（II 列王記10：15）「彼がそこを去って行くと、彼を迎えに来たレカブの子ヨナダブに出会った。エフーは彼にあいさつして言った。『私の心があなたの心に結ばれているように、あなたの心もそうですか。』ヨナダブは、『そうです』と答えた。『それなら、こちらに手をよこしなさい。』ヨナダブが手を差し出すと、エフーは彼を戦車の上に引き上げて、」

まだサマリヤへの途上にあったエフーは、レカブ人ヨナダブに会いました。彼がヨナダブにしたのは、

「あなたは私の見方ですか？それとも敵ですか？」

という質問でした。ヨナダブは、エレミヤが言及しているとても厳格なレカブ人たちの教派の設立者でした。彼は疑いなく、影響力のある人物でした見たところ、彼は心からエフーの反アハブ政策を承認し、エフーの戦車に一緒に乗っているところを人々に見せて、彼への支持を示すことをいといませんでした。

エフー、バアルを礼拝する者たちを抹殺する

（II 列王記10：18－19）「エフーは民全部を集めて、彼らに言った。『アハブは少ししかバアルに仕えなかったが、エフーは大いに仕えるつもりだ。だから今、バアルの預言者や、その信者、および、その祭司たちをみな、私のところに呼び寄せよ。ひとりでも欠けてはならない。私は大いなるいけにえをバアルにささげるつもりである。列席しない者は、だれでも生かしてはおかない。』これは、エフーがバアルの信者たちを滅ぼすために、悪巧みを計ったのである。」

次にエフーがやったことは、自分が大いなるいけにえをバアルにささげるといううその発表をして、バアルのすべての預言者を集めることでした。エフーはバアルを礼拝する気などまったくありませんでした。すべての預言者が一同に会したとき、彼は彼らを殺害しました。彼がバアルにいけにえをささげると言うのはわなで、預言者たちはまんまとひっかかったのでした。

エフー、ヤロブアムの罪を続ける

エフーがバアルの預言者たちを殺害したのは本当ですが、彼は神さまの預言者に立ち返ることをしませんでした。

（II 列王記10：29）「ただし、エフーは、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪、すなわち、ベテルとダンにあった金の子牛に仕えることをやめようとはしなかった。」

エフーは、ヤロブアムが始めた子牛礼拝に戻って行きました。エフーはバアルも、シドン人たちの神々も礼拝しませんでしたが、見たところエジプトの地から出たと思われる、子牛礼拝を行いました。

エフーは主に立ち返ることをしませんでしたが、主のために熱心だったので、神さまは彼にこの地上での報酬を与えられました。つまり神さまは、エフーの家が四代目まで支配するように伸ばされました。

（II 列王記10：30）「【主】はエフーに仰せられた。『あなたはわたしの見る目にかなったことをよくやり遂げ、アハブの家に対して、わたしが心に定めたことをことごとく行ったので、あなたの子孫は四代目まで、イスラエルの王座に着こう。』」

エフーはとても残虐な人物でしたが、神さまは人間の怒りをもってご自分を賛美させるように仕向けられたのです！